令和４年度

授業改善推進プラン

文京区立本郷台中学校

令和４年度　文京区立本郷台中学校　授業改善推進プラン

第　３　学　年

教 科	① 基本方針・指導の在り方	② 生徒の現状・指導上の課題分析	③ 授業改善の視点	④ 授業改善の具体策
国語	○生徒の基礎学力の定着を図るために、課題に対して、目標をもって取り組ませる。 ○今後の進路を見据えて、主体的に生きる力に直結する「話す力」「書く力」「読み取る力」を育む指導を行う。 ○スピーチや小論文を通して、生き方に対する関心を深め、生徒が主体的に学習に取り組む態度を養う。	○ほぼすべての生徒が自らの課題に対して解決したいと思って授業に臨んでいるが、意欲はあるものの必ずしも学力に結びついていない生徒も見られ、学力差が広がっている。 ○「計画性」「振り返る力」の数値がやや低く、改善が必要である。	○「何を学ぶか」以上に「どう学ぶか」「なぜ学ぶか」ということを意識させる。 ○生徒の意欲が自分の学力に結びついたことを実感できるような主体的に学習に取り組む機会を増やす。 ○スピーチや小論文指導等において、計画的に取り組ませ、振り返りも丁寧に行うことで振り返る力を伸ばす。	○単元導入時の丁寧なガイダンス及び生徒自らの課題についての意識作り。 ○日々のグループワークやスピーチ・小論文・ビブリオバトルなど、深い学びにつなげる主体的に学習に取り組む活動。 ○ワークシートや振り返り用紙の活用、相互評価及びそのシェアリング。
社会	○社会的な「見方・考え方」を働かせることで、知識の概念的理解を促す。 ○「問い」を生み出し、その解決に向け追究する機会を積極的に設ける。 ○「広い視野」に立って考察が深められるよう、少人数によるグループワークや体験的学習を取り入れる。 ○世の中のこと＝社会の現実に目を向け、それをひとごとではなく自分の問題にしようとすることで、主権者意識の醸成につなげていく。	○生徒の授業アンケートからは、「振り返る力」と「創造性」に大きな課題があることが読み取れた。年度当初より、レポートやレスポンスカードによる振り返りを行わせているが、この結果からは、①生徒自身が振り返りを通した学びの深まりを自覚できていないことと、②自分の意見や考えを表現する際に、「実証性」「論理性」「個性・主体性」に優れたものであるかどうか振り返ったり、他者と共有したりする機会が不十分であったことが考えられる。	○「深い学び」の実現のためには、生徒たちが学習や人生において社会的な「見方・考え方」を自在に働かせられるようにする必要がある。そのためには、各単元の学習で生徒が考えた（思いついた）当時の人々や政治・経済・国際社会等へのイメージが積み重ねられる必要がある。そこで築き上げられた世の中に対する生徒一人一人の考えが、学習指導要領に示された「どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか」という資質・能力の育成につながる。	○社会的な「見方・考え方」を自在に働かせるため、「問い」を生みだす社会科の授業実践に努める。そのための手段として、史資料を活用し、それに対してグループワーク等で「気づき」や「問い」を引き出し、クラス全体で共有していく。 ○レスポンスカードの問いを発展させ、各単元の学習で学んだことを人生や社会にどう生かすかを再考させることで、自らの学びの深まりを実感させ、学習に対する充実感や達成感を味わせる。
数学	○習熟度に応じた授業を実践する。 （基礎）教科書の学習事項を整理し、基礎基本の定着を図る。 （標準）教科書の学習内容の定着を図る。発展的な問題にも積極的に挑戦していく。 （発展）積極的に入試問題や応用問題をチャレンジし、物事を数学的に考察する力を養う。 ※３展開のときは、生徒の学習理解度に応じて、基礎・標	○生徒授業アンケートで「先生は授業でわかりやすく教えてくれたり、よく考えさせてくれたりしている」と回答した生徒の割合が98%である。また、「先生の授業を進めるスピードは、あなたの学力に合っている」と回答した生徒の割合が 88%だった。 ○課題については、昨年度と比較してほとんどの生徒が、期限内に提出することができている。	○期末考査や単元テストを実施した結果を分析して、以下の通り、改善に取り組んでいく。 【基礎】計算技能の定着を図るため反復練習に取り組む。問題解決のための途中の流れを明確にしながら、自力解決できる力を身に付ける。 【標準】基本事項は繰り返し練習することを継続する。思考・判断・表現の力を伸ばすために、途中式や必要な考えをまとめて友だちに共有す	○机間指導する中で、ノートに途中式を書いている様子を積極的に評価する。また、各試験後の間違い直しレポートを通して、途中式や問題を解く上で必要な考え方をまとめさせる機会をつくる。 ○各授業で前回までの復習や、前回までの内容を使う演習を積極的に行い、基礎基本の定着を図る。また、各単元の応用の内容では、生徒主体で課題解決させる授業を展開する。

	準・発展の３クラスに振り分ける。また、２展開のときは、基礎・発展の２クラスに振り分ける。 （共通）毎時間、多く発問し、数学的活動を通して、数学への興味関心を高める。 授業時のノート等、普段から途中式や考え方を書かせ、理由・根拠を明確にして書く訓練をさせる。 ○「入試大問１プリント」等の教材を通じて、基礎・基本の一層の定着を図っていく。 ○単元に応じて、課題解決型学習を取り入れる。数学を用いて課題解決することの楽しさを実感させる。	○単元テストや期末考査では、自分の解いた考え方を記述させる問題や考えが正しい理由を説明する問題を出題した。全体として、時間が限られている中で途中式・考え方を明確にして書くのに課題がある。 ○生徒用タブレットの活用の頻度が多くなかった。	る力を鍛える。 【発展】基本問題は 100%解けるように演習を強化する。思考力・判断力を強化できるように発展問題を多く取り組む。 ○生徒用タブレットの効果的に活用した授業の展開に各担当が取り組む。	○課題の評価基準を予め周知し、目指すべき取り組み方、解きなおしの実践や基本事項の定着をするための活用法を明確に示す。 ○授業時の問題演習では、時間を明確に区切りながら、時間内に問題に取り組んでいく意識をもたせていく。
理科	○動画等の補助資料を活用して、生徒のさらなる興味・関心を喚起する。 ○実験・観察のより高度な技能を身に付けるとともに、レポート等の作成を通じて科学的な思考力・判断力・表現力を高める。 ○科学的な見方や考え方を働かせながら、既習事項を活用して解決する課題を設定し、話し合いや発表など、生徒が主体的に取り組むことができる言語活動を行う。 ○OPPA（ワンページポートフォリオ）を活用して、課題に対する自らの学習をふり返る時間を確保することで、自らの学習を調整する力を育てる。 ○単元ごとの小テストで基礎・基本の学習の定着を図るとともに、入試問題を取り入れた問題演習を実施して学力の向上を図る。	○「意欲的に取り組めているか」という授業アンケート項目で 92%の生徒が「取り組めている」と答えている。また、課題に対して意欲的に取り組もうとしている生徒が 100%に達している。 ○電子黒板の活用は十分だが、タブレット等の活用方法について課題を感じている。 ○OPPA の活用を通して、自らの学習のふり返りができるようになった。また、振り返りノートの作成に意欲的に取り組めている。 ○入試演習に意欲的に取り組める生徒が多い中で、計算、資料の活用における苦手意識から消極的になる生徒がいる。 ○単元ごとに小テストを実施した結果、全体的に基礎・基本の定着は概ね良好であるが、一部に不十分な生徒が見受けられる。また、思考判断表現の単元を苦手にしている生徒が見受けられる。	○基礎・基本の定着ができていない生徒に対する個別の支援が必要である。 ○根拠に基づいた議論を継続し、より高度な科学的な見方・考え方で課題解決に向かう力を養いたい。 ○課題に対する取組や、実験のレポートやＩＣＴ機器を活用した活動等を通して、自主的に調べる姿勢や、より豊かな表現力を身に付けさせたい。 ○入試演習等に取り組む時間を引き続き設定し、教科間の連携をさらに深めると共に基礎・基本の定着、実践的な応用力を身に付けさせる。 ○入試演習等に取り組ませる際に、小グループの集団活動を通して、教え合い学び合いを継続していく。	○単元の小テスト実施で、間違えた問題や授業での疑問等について、振り返りノートを継続して大切に取り組ませ、評価、還元していく。 ○既習事項を活用する演習の時間を充実させ、思考判断表現力を向上させる。 ○実験やグループ活動、入試演習に取り組む時間を通して、ＩＣＴ機器を活用し、対話的な学習活動を行うことで、生徒の科学的な見方・考え方を活用しやすい授業を展開する。 ○定期考査に入試を模倣した問題を取り込み、知識理解および応用力の定着度を確かめる。
英語	○まとまった内容の対話や描写を聞いたり、読んだりして要点を把握できるようにする。 ○教科書で学習した英語を再話したり、場面を３文以上で描写することができるようにする。 ○自分自身、目標、社会的な話題について、習った語句や文構造を使って、30 話以上で話したり、50 語程度で書くことができるようにする ○教科書で学習した語句、文構造を身に付けさせる。 ○音読筆写、語句や文構造の復習を中心に、授業と家庭学習を関連させ、学習習慣	○80～100 語程度の英語を聞き、概ね内容を理解することができる。教科書以外の文章の読み取りは、語彙力が不足する学習者が多い。 ○本文の再話にはイラストや写真、キーワードの提示が必要である。 ○語句を調べながら書くことはできるが、制限時間を決めて文章を書く練習が必要である。 ○日本語にない表現（現在完了形、後置修飾など）は意味や構造が難しいと感じる生徒が多い。 ○家庭学習の習慣は概ね身に付いている。	○英語の音声、内容を聞き取る力を向上させる。語彙を意識的な触れる機会を作る ○内容理解、音読をした英文を自身の言葉として再話、描写できるようにする。 ○時間内に決められた内容、分量の英文を書く機会を設定する。 ○基本的な文構造の反復学習 英語のもつ意味を学習する ○タブレット PC を活用して音読筆写の家庭学習課題を充実させる。	○”Listen”のスクリプトの音読シャドーイングを行う。リーディングの後にストーリーの中で語彙を学習させる ○教科書を復習する時間に、絵を見ながら本文内容を説明する練習をする。 ○テーマ決め、１分間考えてから即興的に書く練習を行う。 ○教科書の各パートで文の口頭練習を行い、単元末にワークシートで意味と構造について学習する。 ○タブレットを活用して音読筆写の課題を行わせる。

	を身に付ける。			
音楽	○リーダーを中心としたパート練習のさらなる充実を図り、曲にふさわしい表現を試行錯誤しながら創意工夫し、グループ・ペア活動では全員が主体的に思いや意図をもって学習できるようにする。 ○表現「歌唱、器楽、創作」と鑑賞領域を関連付けて指導する。 ○学習発表会や卒業行事、授業内発表などで目標をもたせ、一人一人が達成感を得られるように指導する。	歌唱分野では意欲的に歌う生徒が多いが、女子は高音が出せず、声が響かない。息の使い方や方向に意識させながら、一人一人が堂々と歌えるようにしていく。また、鑑賞分野では、曲の歴史や曲想に注目し、興味をもって聴くことができ、意欲的に取り組んだ。「紹介文」においても、曲を理解しながら自分の言葉で音楽的価値を見出し、表現することができた。創作分野では、試行錯誤しながら、主体的な活動ができた。	○発声や音楽理論などの基本的な技能の指導を行う。 ○それぞれの生徒が自分の思いや意図をもって表現ができるように曲想について考え、話し合う時間を増やす。 ○グループ学習、ペア学習を通した主体的な学習ができるように指導を行う。	○各学習の目標や視点を明確にする。 ○教材や教具を充実させる。 （楽曲教材やＡＶ機器、アクティブボードなど） ○合唱指導においては、振り返りシート、アドバイスシートを使用する。
美術	○「知識、技能」の造形的な視点を豊かにするために必要な「知識」を ICT、等の活用で指導する。「技能」では制作手順を考えながら見通しをもって表すよう「制作記録」の活用を図る。 ○「発想や構想の資質・能力」の向上を目指しワークシートや発言等を通じて生徒の思いや創意工夫など明確にできるよう指導する。 「鑑賞」では生徒の見方、感じ方がどのように変化したか、それを生徒自身が自覚できるよう図る。 ○「主体的な学習に取り組む態度」では相互評価や自己評価を学習記録や振り返りカード等に工夫し成就感や課題意識を引き出す。	○「知識」では生徒授業アンケートの「プリントや資料類は効果的か」に 80％以上の生徒が「あてはまる」「おおむねあてはまる」と答えているが ICT 機器の活用やタブレットの活用が不十分であった。 「技能」面では生徒授業アンケートの「計画性」が他の項目より 80％弱と低くなっているので見通しをもって授業に取り組ませる。 ○「鑑賞」ではグループワークをする時間が確保できず「コミュニケーション能力」について 達成率は 80％と低かった ○「主体的な学習」については 85％以上の生徒が目標をもって授業に取り組もうとする意欲はあるが「計画性」「粘り強さ」「コミュニケーション能力」には課題がある。	○授業規律は引き続き徹底し落ち着いた中でアクティブな学習場面と集中して制作に取り組める場面と環境を設定する。 ○授業に生徒たちは教員の話を傾聴しているが理解しながら話を聞こうとしているか、発問を工夫し「知識」を「暗記」するものだけにならないようにする。また ICT 機器の活用やタブレットの活用を題材に応じて設定する。 ○授業中のプリントや制作中の作品を個別に把握していく。 ○見通しをもって学習に取り組めるよう「制作記録」や「授業ノート」など生徒自身が学習の経過から変容がわかることが必要である。	○ストップウオッチや提示カードなど授業のメリハリが明確に伝達できる工夫をする ○プリントや制作中の作品は丁寧にチェックし不十分な生徒には適切な支援をおこなっていく。 ○ICT 機器の活用やタブレットを有効に活用する。 ○「制作記録」や「授業ノート」など継続して使用することで理解が深まっていることがわかる書式の工夫。
保健体育	○授業の規律（集団行動）を徹底し、安全に配慮をする。 ○運動量を十分に確保し、体力・技能の向上を図る。 ○全体指導と併せて技能別での活動を取り入れ、個々の技能に合った課題解決ができるよう指導していく。 ○グループ活動でチームや自他の課題解決に向けて主体的に取り組み、技能向上できるよう指導していく。	○多くの生徒が授業の規律を守って活動している。また、生徒授業アンケートで、「授業中意欲的に取り組んでいる」と答えた生徒が 94.9%だった。残りの 5.1%の個々への指導・支援が必要である。 ○昨年度１年間で個々の体力・技能は向上した。引き続き、運動量を十分に確保しながら、個々の課題解決に向けた授業を行う。 ○自己の課題をみつけても、解決するための方法がわからない生徒がいる。 ○互いに助言し、学び合うことができる生徒が多い。１学期は、個々の課題解決を行う授業が多かったので、２学期以降グループ活動を増やしていく。	○整列や挨拶の徹底、ランニングや補強運動を継続的に実施することで、集団行動や体力の向上を図る。また、準備や片付けなどの用具の扱いやルールを指導し、安全に配慮させる。 ○全体指導で、技能の定着を図り、技能別活動を取り入れて、個々に合った技能の習得を目指す。 ○自己の課題に対して、既習事項を活用し、解決に向けて取り組めるようにする。 ○グループ活動を多く取り入れ、主体的に学習できるよう指導していく。	○毎時間、体育係の号令による整列や挨拶、声をそろえてのランニングや補強運動を継続的に実施する。各単元の始めに準備や片付けの仕方、その運動で起こりうるけが等を事前に指導する。 ○個々の技能にあった場を与え、それぞれの場を巡視しながら指導を行う。 ○模範を示したりアクティブボードを活用したりするなど、技能のポイントを説明し理解させる。また、各技能のつまずきや改善するための練習方法など提示する。 ○学習カードやタブレットを活用し、自他の課題を発見させ、解決のための練習方法などを考えさせる指導を行う。

技術・家庭	＜技術分野＞ ○ワークシート等を活用し、情報に関する技術の基礎的・基本的な知識、技能の定着を図る。 ○対話的な学習活動やレポートの作成等を通して、問題解決に必要な思考力・判断力・表現力を身につけさせる。 ○作業記録表や振り返りシート等を活用して、課題に対して粘り強く取り組む姿勢と自らの学習を調整する力を養う。 ＜家庭分野＞ ○調理実習や保育製作の実習を通して習得した知識・技能を定着させ、さらに応用・発展できる技能の向上を図る。 ○幼児との関わり方の課題を保育実習で体験し、試行錯誤する中で思考力・判断力・表現力を高める指導をする。 ○成長と家族と地域の学習では、支えられてきた立場から支える立場への自立と共生の力を養うために、必要な知識・技能の育成を図る。	＜技術分野＞ ○プログラムの作成では、テキストとの課題だけではなく、練習課題にもよく取り組む生徒が多い。授業アンケートの項目「意欲をもって取り組んでいますか」では90%以上の生徒が肯定的な答えをしている。 ○プログラムの作成の実習中に、意見を出し合いながら課題を解決している場面がみられた。授業アンケートの項目「協力して取り組んでいますか」では90%以上の生徒が肯定的な答えをしている。 ○学期末に振り返りシートに記入させ、振り返り活動を行った。授業アンケートの項目「より良くなるように考え、調整しながら取り組みましたか」では90%以上の生徒が肯定的な答えをしている。 ＜家庭分野＞ ○幼児の生活の分野では自分の幼い頃と重ね合わせながら、興味・関心をもち授業に取り組む生徒は多いが、身近に幼児と触れ合う機会をもてる生徒が少ない。 ○保育実習では幼児と積極的に関わろうとする生徒が多い。日常で幼児と触れ合う機会が少ないため、実際の状況に戸惑いを見せる生徒も少なくない。 ○成長と家族と地域の学習では、支えられる立場から支える立場への自立と共生の力を養うことの大切さを学び、家庭や地域の仕事に参加したいと思う生徒は増えたが、その機会を実際にもてる生徒は少ない。	＜技術分野＞ ○練習課題を多く解決することによって、プログラムの作成に必要な基礎的・基本的な知識、技能の定着を図る。 ○プログラムの作成では、協働で解決する課題に取り組むことを通して、思考、判断、表現力を身につけさせる。 ○振り返り活動を定期的に行い、粘り強さと調整する力を養う。 ＜家庭分野＞ ○幼児へ関心、理解を深められる教材や課題を工夫し指導を行う。幼児の心身の発達や生活の様子を、自分の幼い頃と重ね合わせ幼児の成長を理解し、知識の定着を図る。 ○幼稚園を訪問し、幼児とのふれ合い活動を設定する。実際に幼児と触れ合い、習得した知識を活用しながら、試行錯誤する中で、思考力、判断力、表現力 を高める ○家族や地域の人々に支えられてきたことを再認識し、家庭や地域の仕事に積極的に参加し協働するよう促す指導を行う。協働した経験をまとめ発表し合い、互いに実践するために必要な知識や技能を高めさせる。	＜技術分野＞ ○複数の人数でプログラムを作成することが必要な作品づくりに取り組ませていく。 ○協働で作成したプログラムを実行し、評価、修正を加えてよりよいプログラムを作成する。 ○作業記録表、振り返りシートを改善し活用する。問題解決が生徒自身でできるように、適切な支援をしていく。 ＜家庭分野＞ ○ICTの動画を活用し、幼児の年齢ごとの心身の発達や生活の様子を見ることで、授業の内容を理解しやすくし、知識の定着を図る。 ○保育実習や幼児のおもちゃの製作を通して、幼児の心身の発達や生活習慣、遊びのもつ重要性などの理解を深める。幼児の成長にあった触れ合い方に工夫ができ、思考力や判断力を伸ばせる指導をする。 ○成長を振り返ることで、家庭や地域の人々に支えられてきたことを再認識させる。家庭や地域の活動に参加し、協働したことを考察し、結果をワークシートにまとめ発表し合う活動を取り入れ、協働への意識を高める。